

# 講評文

12月24日 2番目

岐阜農林高校

## 「想～そうたとかつぱと用水路～」

私は今回この作品を観て、無知でいることの怖さを強く感じました。自然

と人間の共生がテーマで、主人公である想太たちは河童の住む用水路を守ろ

うと奮闘していました。これは想太たちが河童という存在をきちんと知って

いるからこそできることだと思いました。それは自然に人間、あるいは人間

同士の関係にも言えることで、知らないものを恐れて避けるのではなく、歩

み寄って学ぼうとすることが大切だというメッセージが伝わってきました。

音響の面では、自然に存在する音をたくさん使っていることが印象的でし

た。用水路が流れる音や虫の鳴き声など、観客が身近などこかで聞いたこと

があるような音で臨場感が出ていて世界に没入することができました。一方

で、流れている曲の歌詞とセリフが混ざって何を言っているかが聞き取りづ

らい箇所もありました。大切なセリフを言うときには歌詞付きの音楽を流さ

ないなどの工夫があれば、より集中しやすくなったと思いました。

# 講評文

12月24日 2番目

岐阜農林高校

## 「想～そうたとかつぱと用水路～」

また、ソウタと河童の別れのシーンの照明も印象に残りました。まるで月明かりのような青白い光からは、二人の別れに対する寂しさを感じました。

現在と過去、二つの時空を舞台上に存在させるという難しい展開ながらも、決まった音を流したり、スポットライトを一点に当てたりすることで、はっきりと差別化がされており、観客が混乱しないようにする演出面での配慮を感じました。観ていてとても分かりやすく、現在と過去を行き来する想太に感情移入することができました。

他にも、舞台装置が最初から最後までほとんど変わっていないことに関して、私は自然の循環を表していると感じました。生えている植物の種類が変わっていなかったり、現在でも過去でも用水路の水が流れる音があったりと、想太たちの昔からある自然のあり方を守っていこうという気持ちが表現されていました。タイトルの『想』にも表れているように、現在と過去問わず自然を守っていききたいという想いが伝わってきました。

# 講評文

12月24日 2番目

岐阜農林高校

## 「想～そうたとかっぱと用水路～」

岐阜農林高校演劇部の皆さん、上演お疲れ様でした。